昨日のことを

世の片隅で
より

pinokopapa

昨日のことをもう一度 1

　私がこの町へまた来ることになろうとは思ってもいなかった。もう何年になるだろうか、そう思いながら、この県都で一番にぎやかな街の地下鉄駅に降りていった。ここはかつて通勤で毎日使っていたところだ。よく知っているといえば、確かによく知っている。しかし離れてから長いので、全く知らない所のような気がする。なぜだろう。昔私が通っていた頃と、人々の服装や顔つきが違っているように思う。特に若い女の子の服や話し方が解らない。他の人も何かよそよそしい。そう思うのは、わたしがもうよそ者だから・・・。全く旅行者丸出しで、私はホームに立っていた。

　車両が進入してきて、人に押されるように乗り込む。

　３０代半ばだった。その頃の私は、この人の流れに溶け込んで何の違和感もなく乗り込めていたが、今は全くの異分子だ。乗り込んでつり革に掴まる。ホームには反対側を向いた人たちしかいない。車内の照明が逆光になり、窓ガラスに私の顔が影になって映っていた。そのむこうに水色の制服を着、頭に白い布を巻いたお掃除おばさんが、ちりとりと箒で掃除して回っている。ガラスの中の暗い影は、髪も薄くなった中年男の顔を映していた。胃が固くなっているのが解る。ここでの職を離れ、それと共に次の職を求めて別の土地に移った。

　フウーと息を吹きだす。今私は旅行かばんを下げてビジネスホテルに向かっている。

　車両があわただしく発車した。動く窓の向うで、お掃除おばさんが斜めに振り返り、下を向いた横顔を見せた。私はその顔に見入った。白い布で髪を包んだ中年の女の顔に見入ってしまった。車両の動きに合わせて顔を動かし、懸命に確かめようとした。この中年男の頬に涙が流れそうになった。他人が変に思う、と私は懸命に堪えた。しかし唇がゆがみそうになる。少したるんだ頬と色褪せた肌。目じりに弱弱しさをこびりつかせ、ホームの人たちに見られても、自分は何も見ていないことでその視線に耐えて手

を動かして行く。そんな生活を今の　あれ　はしているのか。

　別れた妻だと思った。私は彼女の事を考えるとき、あいつは、とか、　あれ　とかの名称で呼んだ。目の前にいるわけではない元妻を何と呼べばいいのか解らず、そんな呼び方しかしてこなかった。彼女なんてとても呼べやしないし、結婚する前のように愛称で考えるなんてこともできない。他人に戻ったのに他人じゃない。そんな思いをしながら、私は今日まで引きずってしまっていた。もう関わることは何一つないのに。

　世間並みに、子供の親権は母親側に移った。離婚当初、二人の子供とはよく会えた。元の妻は実家にも帰らず、結局私と共に来たこの都会に住んだ。彼女は帰れなかった。帰っても借金にあえぐ父親しかいなかったからだ。母親は結婚して数年後に亡くなり、後には父親の背負い込んだ借金の巻き添えで、住む家まで追われた父方の祖父母、母方の祖父、そして碌に学校へもやらせてもらえなかった兄弟たちがいた。連れ合いに死なれた父親は、小さなアパートに呆けたようになって住んでいて、里帰りしても寝る部屋もなかった。この人はもう毎日を自分が生き延びるだけで精一杯だった。父親は、娘が離婚したことも半年後まで知らなかった。元の妻も知らせたくなかったのだろうが、知らせても何も助けてくれないとも思ったのだろう。それから、結婚式に呼んだ友人達への見栄もある。今の惨めな姿を見られたくないと強く思っていたようだ。離婚後の姓も、旧姓には戻さなかった。従って娘達も元の姓のままだった。

　付き合い始めたときは、未だ借金を背負い込んでたわけではなかった。彼女が卒業となった年、大学の授業料が払えなかった。そのせいで彼女は中退扱いになってしまった。そして彼女が私のアパートに住むようになった。彼女の親達も碌に住むところがなかった。私は何故私のところなのか解らないまま、彼女をいさせた。そして私は親に結婚するから、と告げた。

　結婚式なんて、しなくていいから。

そう言った。私にお金があるわけもなく、また親に迷惑をかけるわけにはいかなかったからだ。だが私の親はそれを許さなかった。

　家の長男に、そんな訳にはいかない。

結婚式の費用は全部私の親が払った。式の内容について私達は何も言えなかったし、言わなかった。すると親が彼女に、ウエディングドレスと二回のお色直しのドレスを選ばせた。彼女の母親は、試着する彼女を目を潤ませながら見ていた。私の母親も嬉しそうだった。

　結婚式の会場は、私の両親が地元で選んだ。ホテルの最上階のチャペルで、牧師さんの説教と祝福の言葉が胸に響いた。後ろで賛美歌を歌う父の朗々とした声がわずらわしかった。しかし彼女の輝くような顔を見ると、こうして良かったとおもった。チャペルの鐘が鳴り響いた。

　披露宴の彼女は、二回のお色直しの度に彼女の友達から＊＊、綺麗よぉ、おめでとう、と声を掛けて貰っていた。彼女の顔一杯の笑顔は舞い乱れる蝶のように美しかった。肌は透き通り、笑顔が幸せ一杯だった。

　式の翌日、二人だけでＪＲの駅のホームに立っていると、昨日の喧騒が嘘のようだった。私達二人は話すこともなく、黙りこくって電車を待っていた。すると父と母が急いで上がってた。見送る人もいないとさびしいだろうからと言っていた。父が

　お前、金持ってるか。

と聞いてきた。

　３０００円ぐらい。

　馬鹿、早く言え。

そういって、１万円札を２枚、財布に入れてくれた。

　新婚旅行に行かないんだから、帰りに何か美味しいものでも食べなさい。

父がそういったとき、彼女がおびえたような目をしたことに気がついた。

　電車に乗ると、もうあとは二人きり。動き出した電車を父母が見送っていた。後はあまり話もせず、二人だけで帰った。なにか空虚なさびしさが残った結婚式だった。

　地下鉄車両が線路をきしませて鋭い金属音を立てる。次の駅で降りて、引き返そう。そう思った。えっ、引き返す？引き返してどうする。顔を合わせて、

　　お互い老けたなあ

と言い合うのか。

　あれからどうしていた

と聞くのか。聞いてどうする。あの地獄と言っていい日々を忘れたか。そう思ったとき、私はあの日々を忘れかけているのに気付いた。あの時の事実は覚えている。が、そのときのお互いに向けた憎しみ、苦しさ、嫌悪、罵声、怒鳴り声、子供の悲鳴、それらが消えてしまっている。思い出したくないものを思い出さないようにして来たからか。昨日が今日で、今日が明日だとそう思って、忘れた振りをして生きてきた。ましてや、養育費を払わなくて良くなったときから、私は本当に忘れた振りが出来るようになり、それが身に付いた。

　今思うと首のすくむような気がする。おろかだった。私が悪いのだ。いろんな言い方があるだろうが、お互い若すぎたというのは違う。お互いではなく、私の子供気分が抜けなくて、それで身勝手が平気で出来たのだ。彼女は貧乏に耐えていた。私は給料を彼女に与えず、食費いくらと微々たる物を与え、あとは必要なとき出して、や、っ、て、た。やってたのだ。私が稼いだ金だから、私のもので、私が勝手に使う。そう思って恥じなかった。私は自分の欲しい物を諦めなかった。のちに彼女が言った。

　あんなんでいいのか。苦労するよ。

　お坊ちゃんだよ。世間知らずの苦労知らずだよ。

　あんな風に育てた覚えはないんだけどなぁ。

その代わり優しかった。その育ちのよさが優しく見えた。彼女はそういっていた。その親が、影で経済的に彼女を助けていた。そしてもっと常識的になれと意見した。子供が出来て、その出産費用まで親が出したところで、私も親の意見に従った。

子供が出来たら、親は自分のしたいこと、したかったこと、全部諦めて、子供のために働くんだ。少なくとも私はそうしてきた。

父が言った。

そんなこと、せんでもいいのに。したいこと、してくれた方が　　子供は嬉しい。

そういう私を父は見詰めていた。

彼女の鬱病は、入院して治療した方がいいです、と医者に言わしめるほどだった。彼女は、余命後何ヶ月と宣告されている母親の見舞いの枕元で私の事をなじった。母親は苦痛に耐えながら、彼女を諌めた。その母親の苦痛の緩和にと、私の母が高い漢方薬を何度も送った。それは確かに効果があった。そしてそれが無くなりかけると彼女の母は心細がり、娘に電話してきた。彼女は義理の母に直接言えなかった。それで、私に電話させ、もうなくなりかけてるんだけど、と言わせた。電話の向うで不満げな雰囲気が流れるのを感じた。私までが気詰まりだった。

だが母親が存命中は、彼女もまだ大丈夫だった。母親の葬儀に、私の祖母が作ってくれた喪服で参列した。痩せて艶のない顔は、悲しみだけではなく恨みのようなものをまで含んでいた。彼女の父も、彼女自身も、葬儀に駆けつけてきた私の母に、出席してくれた礼も漢方薬の礼も言わなかった。悲嘆のあまり、気が回らなかったんだろうと、私が言い訳をした。彼女は子供の手を握り、俯いたっきりの父親のそばに立って、私と母のそばには来なかった。

離婚の話など、どこにでもある、ありふれたことだ。

父はそういった。

だけど・・・、そんなことでいいのかなぁ。

欝の原因が、お前のしでかしたことなら、ストレスの元がなくなれば快方に向かうよ。あの人に自分から直そうという気がなけりゃ、それしかないと思うよ。別れてや

って良かったんじゃない？

　じゃあ子供は？

そう言いかけて止めた。用意周到に、そして綿密に調べ、貯金通帳も一切見せず、以前安心させるために書いて渡しておいた離婚届を、

　今日、出しておきました。

　明日、引越しの運送屋さんが来ますから、それで出て行きます。

そう告げると、妻はさっさと鍵のかかる部屋に逃げ込み、鍵をかけて出てこなかった。子供もその部屋にいた。

　父親なんて、子供には何も出来ない。監護権？親権？みんな母親のもの。父親の存在は、なくなって解る。羽を広げて、どれだけ世間の嵐から家族を守ってきたか。それでも後ろから男の背中に切りつける。世間と家庭、両方から攻撃されるのが父親だ。あなたの父親はこんな仕事をしてきたと、子供に背中を見せるぐらいしか能がないんだ。

この言葉は父の愚痴のようにきこえた。

　妻と子供が不意打ちのように出て行ったあと、夏休みの中ごろ、初めて子供が私に会いに来た。そのときの固い顔を見て、私は父の言ったことがわかった気がした。話をするにも、何を言えばいいのか解らない。ついこの前出て行ったのに、何を聞けばいいのか見当も付かないのだ。だから、せいぜい遊園地につれて行き、ファミレスでご飯を食べさすことしか出来なかった。学校はどうだった？お友達の＊＊ちゃんはどうしてた？そう聞いて話をするのは、母親だった。

　彼らが出て行った後、残されたものを片付け、

　ああ、これだけのもので生活していたんだ

と思い知らされた。そして、私がこれから生活していくのに必要なものは、もっと少なくてよかった。

　父母が出てきて、養育費を払わなければならないから大変だろうと家賃の要らないように２ＬＤＫの中古マンションを買ってくれた。

　やり過ぎなんだよ！だからこれも負担になってたんだ。

　そうだな、やりすぎだ。

親二人が寂しそうに笑った。

　うわぁ、ここパパの部屋？アパートだけどパパのお家？

　じゃ、こっちは＊＊と私の部屋で、あっちがパパの部屋！

　うん、そうしよう。机が要るね、ベッドも２つ。

なにか会話が弾み、楽しい思いをしていたのだが、急に二人が黙ってしまった。そして、下の子が泣き出した。上の子もじっと我慢していたが、声を殺して泣いた。言葉もなく、泣いた。

　あの時父が言った、今時ありふれたことだ、という言葉が残酷に響いてくる。
　しかし、一生棒に振った。
ありふれたことだが、全てを無くしてしまった。私はあいつを理解せず、あいつは私に全てを要求した。そして手に入れられないと知ると、全てを持ち去った。
　女性を優しいとなんか、誤解するな。女は凶暴な動物だよ。しょうがないじゃあないか。子供を育てなければならないんだから。男みたいに、愛だ正義だなんて、通用しない。全てを懸けて子供を守るのが女さ。母性って恐ろしいものなんだよ。
私が離婚に追い込まれたと知ると、上司がそう述懐し、同情して見せた。底の浅い言葉だと思った。しかしそれも本音かもしれない。彼も離婚していた。それもあって、私は無事仕事を続けられた。
　一人暮らしも始めは辛かったが、大学から一人で生活してきたから、直ぐに慣れた。それでもマンションのドアを開けたとき、暗闇が口をあけるような感覚は何時までも続いた。
　マンションに子供のものを少しずつ買っておいて驚かせ、喜ぶ顔を見るのが楽しみになった。しかし、それも最初のうちだけだった。子供らは次第に暗い顔になり、泣きそうな表情さえ見せるようになった。そんなことからか、会う事さえ間遠くなっていった。
　子供と会うとき、私は顔や手足をよく観察した。妻は離婚前、子供を叩いた。子供は私達の怒鳴りあいに、上の子は耳をふさぎ、下の子は、やめてぇ、やめてぇと叫び続けた。あいつ　は壁に物を投げ、私のものを壊し続けた。そして、上の子が母親のきげんを損なわないように嘘をつくと、跡が残るほど叩いた。上の子はいつも声を殺して泣いた。
　欝は直りませんから。ストレスの元が解消されても、うつだけは残ります。主原因が除去されても、欝の脳代謝異常は残ってます。
医者のその弁をいつも頭に置いていた。
　下の子が中学へ入るときも、彼女は余分にお金を要求してきた。私は黙ってそれに答えた。だが、もうその頃には子供は私のところに来なくなった。更に、私も不景気で会社が傾きだし、退職せざるを得なくなった。
　あんたは残ってもらわなくっちゃいけないんだよ。
上司にそういわれたが、もうこの土地を離れたかった。私は彼女にそのことを告げ、今のマンションも譲ると知らせた。過去の清算の意味もあったが、彼女への優しさの積り

もあった。子供のために買っておいたものは残して、名義を書き換えた権利書と鍵を送った。ここを離れる時を知らせても、誰も見送りに来るとは思えず、黙って出て行った。

　そのあと何があったかは知らない。私は新しい職場に慣れようと懸命だった。そんな中上の子からメールが来た。

　お父さんはまた私達を捨てたのですね。

養育費を払ってさえいれば、なにも言って来ず、卒業したとも進路相談もないことが続いていた。そんなもんだと私は思っていたから、このメールは不意打ちだった。

　マンションは快適だろ？

そう返事したが、何も帰ってこなかった。私は自分が切り離されたことを再確認することになった。

　もう直ぐ、養育費の支払いがおわるんだから、再婚しなさい。

父と母が強く勧めてきた。私は

　あんな疲れることは、もういい。

と断わった。

　じゃあ、お母さん達が死んでしまったら、どうするの。あなた一人になって、年取って行くのよ。孤独死ってことさえあるかもしれない。

　それから、こんなことあってはいけないけど、あなたが先に死んじゃって、そのあと私達が死ぬと、お葬式にあの嫁と子供が来るわ。そして、あなたの相続分を寄こせって言うのよ。

　孫に、だろ。

　孫だけなら良いけど、あの嫁の手に私達の残した財産が、何もしないで転がリ込むのよ。

　そんなに大げさに言うほど財産もないくせに。

　あなたをあんなに苦しめた嫁には、私達の汗水垂らして残したものを一文も渡したくないのよ。お義母さんのお葬式の時のあの失礼な態度。金遣いの荒くてだらしないところ。こういっちゃ、なんだけど、あっ、この子は違う、って最初見たときから思った。

　だから再婚しろって？

こんな話は何回もあった。職を変え、転地してからは、親元に近くなった性か、特に激しくなった。だがそれも、父が他界してからはぴたっと言わなくなった。あいつも多分一人じゃないだろうとは思ったりしたが、私は再婚など思っても見なかった。だが、確かに病気をしたときは辛かった。もう弱りこんだ母に頼んで付き添いをしてもらったが

、つくづくと身にしみた。そして、寝ている間、長女が生まれた時のことを思い返した。今までこれを、何度繰り返して思い出したことか。

妻の実家に帰って産むと言う事が出来なかったので、私達はこのなれない土地で二人で産婦人科を捜した。そして検診に行き、やっと予約が取れはしたが、お産の費用がなかった。お部屋はどうしますか？と聞かれても、個室だのスイートだのは頼めなかった。

仕事中電話がかかり、陣痛が始まったと聞いて、上司に帰らせてというと嫌な顔をされた。親も誰も付き添っていないというと、顔をまじまじと見られた。私は携帯で、すぐには帰れない、いざとなったら救急車を呼んで、というしかなかった。

就業時間を待って、誰の顔も見ず、会社を飛び出し、アパートにむかった。彼女は痛みを堪えながら泣いていた。お母さん、お母さん、助けて、と泣き続けた。私は病院に電話し、タクシーを拾い、用意してあった荷物を持って妻を抱えるようにして連れて行った。病室から私は締め出され、外で待っていると妻はもう病衣に着替え、産室に移された。そして長いのか短いのか解らない時間が過ぎた。小さな、か細い声が・・・、それを聞いたとき、私は産まれた！と叫んでいた。夜中の二時を過ぎていた。しばらくして産室にはいってゆくと、看護婦さんに子供が抱かれ、妻は汗を拭いてもらっていた。

抱いてみますか。

そういわれて、私は子供を抱いたが、小さくて軽くて、壊してしまいそうで怖かった。

奥さんはもう直ぐ部屋に帰りますから、待っていて上げてください。

そういわれ、私は外に出た。そして携帯で父母にメールした。

生まれたよ、女の子、二人とも元気。

すぐにメールが帰ってきた。

よかった。

父だった。そして

あなたが生まれたときは、お父さんの周りが何も彼もやってくれて、お父さんはなんもすることがなかった。ただうろうろおろおろして、周りを回っていただけだった。あなた達は二人で成し遂げた。お父さんよりあなた達の方が偉い。

そういってきた。

地下鉄が次の駅に止まった。私は一応下車した。降りなきゃ、という義務感のようなもので降りた。引返すのだろうか、引返さなければならないのだろうか。どうすればいいのか解らなくなっていた。

妹が、元義姉さん、お兄さんのマンション、売っちゃったらしいよ。
と言ってきた。
お兄さんの住所も電話番号もわからないから、お母さんに言ってきたそうよ。お母さんは知らせるなって言ったけど、腹が立ってしょうがなくって。
私は腹が立つ前に不安になった。そんなに金に困っているのかと思ったからだ。何かあったんだろうか。
聞いてる？
お兄さん、誰かいないの？もういいでしょう、再婚しなさいよ。
もういい。
そういって、電話を切った。不安は確かめようがなかった。
一応、前の駅に引き返す電車に乗った。荷物が重かった。
あの人と結婚してる間は、なにか憑き物が憑いてるみたいだったが、今は子供の時に戻ったみたいに見える。
離婚直後、父母がやってきて私の顔を見るなり、父がそういった。
家に帰って来ても、いつもピリピリして、怖いぐらいだった。＊＊さんも、なんか怯えたような対応をするし、お父さん達の方が面食らってたよ。いじめたりしないのにね。
あの頃からおかしかったんだと思う。長女が生まれて、私も当時の職場の過酷さに疲れきり、二人とも行き場のないところで生きていた。妻は、子供がこんなだからなんとかしてと、時をかまわず電話してくる。仕事は追いかけるようにやってくる。もうどうしようもない思いだった。そしてある日、私は一晩帰らなかった。その日から私は火宅の人となってしまった。
妻の鬱病が始まった。ごく平穏に見えていても、突然怒鳴りだし、物を投げて荒れ狂った。携帯を見せろと迫り、見せると見もしないで投げつけて壊した。私は耐えるしかなく、最後はどうにでもなれと放っておくと、それさえ攻撃の材料になった。そして私は、妻が子供を殺してしまわないかとさえ思った。
地下鉄の車両が元の駅に帰ってゆく。マンションを売ったと聞いたから、妻はもうこの地にいないと思い込んでいた。しかし考えてみると居ても不思議じゃなかったんだ。何も知ろうとしなかっただけの事だと思い返した。離婚のあと、彼女はそれなりの仕事についていたはずで、それでなんとか暮らしていけると思い、振り返らなかった。何年かの養育費の振込みが、彼女とのつながりだった。ところが、私のリストラがあって退職し、私は親に金を借り、数年分の養育費をまとめて払い、マンションと譲った。そうすることで、全てを忘れた振りが出来るようになった。

だが、人生、何度でもやり直しが出来ると言うのは嘘だと思う。もう昔には帰れないし、残ったことはなくならない。

駅に車両がすべりこむ。なぜか彼女が懐かしいような気がした。一度っきりの人生で、一人だけと出会い、一生一緒に過ごせれば、それが幸せ、それを踏み外せば、元には戻らないぞ、と父が言ってた。だから、これで身軽くなれ、とまとめて払う養育費の金を、父はポンと出してくれた。

親父さん、やっぱりあんたはやり過ぎなんだよ。

車両が止まり、ドアが開く。するりと外に降り立ち、周りを見た。掃除のおばさんはいなかった。捜してどうする？そう思いながら、何本かの車両を見送り、上にも上がってみた。だが、偶然は起らなかった。そうか、そんなもんか、そう思いながら電車に乗った。大体、あれだって見間違いかも知れないし、と思う。と、動き出した車両から向う側のホームに、掃除のおばさんと若い娘の話してる背中が見えた。